

7 愛防第 10 号
令和 7 年 8 月 13 日

各関係機関・団体長 殿

愛媛県病虫害防除所長

発生予察情報の送付について

病虫害発生予察注意報（第 1 号）を下記のとおり発表したので送付いたします。

令和 7 年度 病虫害発生予察注意報（第 1 号）

令和 7 年 8 月 13 日
愛 媛 県

病虫害名 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、イネカメムシ等）

作 物 水稻（早期、普通期）

1 発生地域 県下全域

2 発生程度 やや多～多

3 注意報発表の根拠

- 1) 7 月の定点調査では、早期、普通期とも本田で発生地点率が平年より高く、掬取り虫数も平年より多くなっている（表 1）。
- 2) 7 月中旬～8 月上旬に行った広域調査において、本田では県下全域で、畦畔では特に東予で発生地点率が高くなっている（表 2）。また、畦畔における掬取りによる虫数は 8.7 頭（全県）と平年（6.9 頭）に比べ多くなっている（表 2）。
- 3) 広域調査で発生の多かった種はアカスジカスミカメ（写真 1）、ホソハリカメムシである。
- 4) 予察灯の誘殺数は 6 月下旬から 7 月下旬に多かったが、現在は多く推移している 1 地点を除きほぼ平年並である（病虫害防除所ホームページ掲載データを参照）。
- 5) 四国地方の 1 か月予報（令和 7 年 8 月 7 日発表）では、平均気温は高い、降水量は平年並とされており、発生にやや助長的である。

4 防除上の注意

- 1) 出穂直前の除草は、斑点米カメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるので注意する。
- 2) 出穂期の定期防除で圃場密度を下げ、乳熟期（出穂後 10～14 日）に追加防除を実施する。多発時にはさらに 7～10 日後に追加防除を行う。ただし、粒剤を使用する場合は液剤・粉剤の散布時期より 3～4 日早く散布する。
- 3) ミナミアオカメムシやクモヘリカメムシは、本田内でも繁殖し、斑点米の産出能力も高いため、登熟後期まで被害が続く。このため、防除実施後も発生状況には注意する。
- 4) 局所的にイネカメムシ（写真 2）の発生が多いところも見られるが、本虫は他の斑点米カメムシ類と異なり、出穂直後より吸汁し不稔を発生させる。圃場観察を行い、出穂前に本虫の発生を認めた場合には出穂期の防除を必ず行う。
- 5) 主な防除薬剤は表 3 のとおりであるが、周辺作物や生物（魚・蚕・ミツバチなど）に影響を及ぼさないよう注意して選択する。

表1) 7月定点調査における斑点米カメムシ類の発生状況

		発生圃場率 (%)		掬取り虫数 (頭)	
		R7	平年	R7	平年
早期	本田	54.5	34.4	3.1	1.9
	畦畔	42.9	42.6	4.3	3.3
普通期	本田	25.0	13.4	0.8	0.2
	畦畔	90.9	70.4	19.9	16.0

1) 掬取り虫数：捕虫網の20回振り虫数

2) 平年値はR6～H27の10年間

表2) 広域調査における斑点米カメムシ類の発生状況

	発生地点率 (%)				掬取り虫数 (頭)	
	本田		畦畔		畦畔	
	R7	平年	R7	平年	R7	平年
全県	32.1	24.7	59.8	54.7	8.7	6.9
東予	28.6	27.3	79.4	57.5	19.2	8.1
中予	30.7	21.0	53.4	55.2	4.9	7.5
南予	50.0	32.6	44.7	54.4	5.0	3.7

1) 調査時期：7月中旬～8月上旬調査

2) 平年：R6～R2の5年間



写真1) アカスジカスミカメ



写真2) イネカメムシ

表3 主な防除薬剤（令和7年度愛媛県農作物病虫害等防除指針より抜粋）

薬剤名	IRAC コード	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	毒性	
					人毒	水産
(液剤)						
スタークル/アルバリン顆粒水溶剤	4 A	2,000倍	収穫 7 日前まで	3 回以内	普	△
ダントツ水溶剤	4 A	4,000倍	収穫 7 日前まで	3 回以内	普	△
キラップフロアブル	2 B	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2 回以内	普	○
エクシードフロアブル	4 C	2,000倍	収穫 7 日前まで	3 回以内	普	○
(粒剤)						
スタークル/アルバリン粒剤	4 A	3 kg/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内	普	△
ダントツ粒剤	4 A	3 ～ 4 kg/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内	普	△
キラップ粒剤	2 B	3 kg/10a	収穫14日前まで	2 回以内	普	○